

2026年度 一般選抜（前期） 2月2日

国 語

〈注意事項〉

- 1 解答はじめの合図があるまでは、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 解答用紙は折り曲げたり、汚したりしないでください。
- 3 問題は1ページから13ページまでです。
- 4 監督者の指示に従い、解答用紙に次の事項を記入し、マークしてください。

記入、マークするときは黒鉛筆（H、F、HBに限る）を使用し、誤ってマークした場合は消しゴムでていねいに消し、新たにマークし直してください。

- ①解答用紙の氏名・受験番号欄に「氏名」「受験番号」を記入し、受験番号マーク欄にマークしてください。

※記入例（受験番号「410324」：氏名「科学 大」の場合）

氏 名	科 学 大					
	①	②	③	④	⑤	⑥
受験番号	4	1	0	3	2	4

受験番号 マーク欄	①	0	1	2	3	<input checked="" type="radio"/>	5	6	7	8	9
	②	0	<input checked="" type="radio"/>	2	3	4	5	6	7	8	9
	③	<input checked="" type="radio"/>	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	④	0	1	2	<input checked="" type="radio"/>	4	5	6	7	8	9
	⑤	0	1	<input checked="" type="radio"/>	3	4	5	6	7	8	9
	⑥	0	1	2	3	<input checked="" type="radio"/>	5	6	7	8	9

- ②入試区分欄の「一般前期（2/2）」をマークしてください。

入試区分	<input checked="" type="radio"/> 一般前期 (2/2)
教 科	<input checked="" type="radio"/> 国語 09

- ③解答用紙は、表面がマーク式の解答欄、裏面が記述式の解答欄になっています。
- 5 問題冊子は持ち帰ってください。



## 問題一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「多文化共生」や「異文化交流」が声高に叫ばれるようになってずいぶん経つように思われる。現代においてはグローバル化が進み、異なる文化圏の人との取引は当たり前となり、国境を超えた移住や旅行も頻繁に行われるようになった。

異なる他者や社会に対して偏見をもつのは、その人間性や尊厳を認めようとしないうで反倫理的であるし、また、そうした偏見は、異文化の良さを理解したり、さまざまな経験を積んで知的に成長できるチャンスを阻害するものである。つまり、多文化共生への訴えは、単なる倫理的なお題目というだけでなく、合理的な指針ともいえる。それを推奨する立場は総じて「リベラル」と呼ばれている。

イ

一般的にいうところの「リベラル」とは、凝り固まった偏見からの解放を訴え、そして、それぞれが異なる他者に対して「寛容」となり、格差<sup>(1)</sup>是正や差別解消のもとで他者との共存を推奨する立場である。そして、この「リベラル」は、社会的弱者や差別・偏見の対象であるような人々の意志や選択を尊重するという点で、基本的には、異なる価値観の人々の思想・言論・選択の自由を認める「リベラリズム（自由主義）」の立場でもある。

I、そのようなリベラル派においては、異なる文化圏の人たちとの「共生」「交流」を謳い、超国家的連帯の理念を掲げる人が多いが、身近な公共圏における共生・交流を日頃から（少なくとも同じ程度には）重視し、意見の異なる隣人の自由を尊重しているかといえば、若干疑わしいケースもある。

たとえば、頻繁に海外の人とビジネスをしたり、海外旅行について「違う価値観をもったいろんな人と交流するのはいいことだよね」とのたまう人たちは、常日頃から同じ気持ちで——つまり敬意と尊重の姿勢で——そこまで気の合わない職場の同僚に対してきちんと接したり、インターネットで異なる意見の人たちと丁寧な交流をしているのだろうか？ また、政治的スタンスについて、他国の人々との違いについては「まあ、考え方はいろいろで、多様性は尊重しないとね」といいながら、国内で異なる政治的意見をもっている人に対しては「バカじゃないの？」とか「あなたみたいな人とは話をするだけ無駄！」と揶揄してはいないだろうか。遠い国の異なる人たちの多様性は尊重しても、異なる隣人に対してはそうでもない、ということはないだろうか。

ロ

もちろん、自身が暮らす場所の在り方に直接関わるので、隣人の政治的意見には敏感に反応することもあるのかもしれない。

Ⅱ、直接的にはないにせよ、他国の人々の価値観やスタンスだって国際情勢に影響し、その波は自分たちが暮らすところに届く(それこそグローバル化のもとで「繋がっている」ということなので)。ゆえに関係の遠近をもって、遠い他者の価値観はありのままに許容し、近い他者の価値観には厳しい目を向けることを正当化することは難しいように思われる。

そもそも、リベラルであるということは自国のみを固執することなく——ゆえにリベラルは、自国の利益にのみ固執する偏狭なナショナリズムを批判するのであるが——この世界をよくするための「理」にこだわるはずである。それは、旧来の不合理から脱却し、本当の意味で自由になるというスタンスであり、だからこそ、それは他国か自国かにとらわれるべきではなく、是々非々であるべきだろう。

ハ

もつとも、リベラルにおいても、当事者たちの自治的な観点(集団的自律)からナショナリズムを認める余地はある。「他国にはそこでの人々の公共圏や政治が、自国には『われわれ』の公共圏や政治がある」などと言って、だからこそ他国よりも自国の隣人たちの価値観に対して厳格な批判の目を向けるということを正当化する人もいるだろう。

Ⅲ、現代のリベラルは、人々がグローバル化のもと、自国はもとより世界において自由に活動し、いつでも誰とでも自由に繋がれる「個人」であることを推奨しているように思われるし、だからこそ、そうした個人を束縛しようとするナショナリズムや集団意識に対しては批判的であることが多いように見受けられる。しかし、意見の異なる隣人がその思想・表現の自由を行使しようとする段になると、「バカなことをいうな!」と叱責したり、「議論する価値もない」といつて断罪し、そうした他者を公共の言論空間から追放しようとする姿勢がときに見受けられる。「正しいことを主張する」側であるリベラル派は、伝統的思想を重視したり古典的な表現の自由を推奨したりする(自由主義的な)反リベラル派に対して集団的に攻撃したり排斥しようとしたりする場合、「彼ら(反リベラル派)は勉強不足だ」とか「古い考えに凝り固まっている」といつて、自らの知的水準の高さや教養をもって異なる意見をやりこめようとするところがある。しかし、そのやり方は本当に共生において必要な「寛容」といつて徳をもっているのだろうか。

ニ

そんなとき、リベラル派のある人たちは「この国は、海外の先進国に比べて遅れている」とか、「大衆は流されやすく、思考することを放棄している」とか、「社会不安がそうした間違った集団心理となっている」といつて、一方的な批評や、都合のよい精神分析などをもって、異なる意見をもつ大衆を揶揄することもある。ひどいときは、「間違った思想にとりつかれたあいっら(自分たち

の論敵とその支援者である市民)には表現や言論の自由を与えるべきではない」とまで言い放つたりもする。現代的な多文化共生を訴え、古い価値観を打破する自分たちリベラル派こそが真なる自由の担い手であると標榜<sup>ほう</sup>してはいるが、その姿勢は、かつて少数者が多数者を支配していたときのような、エリート階級による抑圧的社会を彷彿<sup>ほうふつ</sup>とさせる。

ホ

もちろん、そうした過激にもみえるリベラル派の主張にも一理ある。というのも、そうしたリベラル派が異なる意見を糾弾するような排撃的態度をとってしまう背景には、この自由主義的な社会というものが望ましいものだけでなく、よろしくないものまでも包摂<sup>B</sup>してしまい、その結果、「公共」の問題を自浄しきれなくなってしまうという事情があるからである。ここには、思想史における「リベラリズム(自由主義)」と、その後<sup>B</sup>に到来した「リベラル」とのズレという問題をみることができる。

従来、政治的スタンスとしてのリベラリズムは、政治権力の抑圧から個人を守り、個人の身体・財産・思想・表現の自由の保障を求める近代市民社会の理念そのものであった(ロック、モンテスキュー、ジョン・スチュアート・ミルなど)。しかし、そうしたリベラリズムが普及した社会は、必ずしも理想の社会というものではなかった。

思想史的には、「近代」とは「啓蒙(enlightenment)」の時代である。人々は古い伝統や偏見といった不合理なものから逃れ、理性に目覚めて自由を獲得した時代、そして、自由な個人たちが民主主義のもとで一致団結し、苦しみのない幸福な社会を築いてゆける時代といわれるが、建前上はそうでも、実際はそのようにうまくいったわけではない。近代になっても、人は何らかの偏見や頑なな思い込みにとらわれなくなったわけではない。それは、救済されるべき人をみようとせず、真なる自由<sup>(5)</sup>に無頓着<sup>(5)</sup>なまま、ただ「政治権力からの分かりやすい干渉が少なくなった」ということを喜んでいるだけの不完全な自由社会にすぎなかった。当然、そうした社会は、真の幸福へと続くものではない。社会的弱者は相も変わらず、差別や困窮といった鎖に縛られ、そして、そうではない人たちはそれをよしとする冷淡さや、みせかけの自由という思考のくびきから逃れてはいない。

<sup>C</sup>こうした状況下、その思考の枷<sup>かぎ</sup>から人々を解き放つと同時に、抑圧的状况のもとで生活していた社会的弱者を解放する新時代の担い手として登場したのが「リベラル」であった。このように登場したリベラル派からすると、旧来のリベラリズムやその後のネオ・リベラリズム(ネオリベ)は、不自由な自由主義でしかない(この文脈において、古典的なりベラリズムは右派である一方、現代的なりベラル派は左派として位置付けられる)。

リベラル派の特徴としては、政治的な「自由」に加えて、旧来の不合理なものからの「解放」というものもあるが、その解放運動は本来、旧来の不合理な偏見が否定・拒絶していきまざまな価値観を許容する「寛容さ」を訴えるものであった。リベラル派は、「不寛容な従来の偏見や慣習は不合理であり、その不合理さこそが、個人々が享受すべき真なる自由を否定する社会をつくって

きた」と主張しながら、さまざまなものに寛容となることで、誰もが真なる自由を享受できる合理的な社会をつくることをその使命としてきた。

こうしてみると、リベラル派は間違ったことを主張しているわけではない。実際、古典的ナリベラリズムの延長線上において、それが取り組もうとしなかった課題に取り組もうとしたのがリベラル派であって、理念上、「多様性」や「個人の自由」を推奨するという点では自由主義と同じであったはずである。しかし、多少なりとも古典的リベラリズムが招いた弊害に対応しようとするリベラル派においては、どのような自由を強調するかについて古典的リベラリズムとのズレが生じ、それが、公共圏におけるリベラル派 vs. 反リベラル派の対立の構造を形作っている。

IV、経済に関するリベラリズムにおいては、自由市場の結果としての格差は許容すべきものである。しかし、リベラル派は、生まれつきの能力差や運のよしあしなどで生じた経済格差を放置することで社会的弱者がそうではない人たち以上に暮らしていく状況をそのままにしておくことは許容できない、と主張する。

また、思想・表現の自由に関するリベラリズムにおいては、多少過激な性的表現であろうが異なる価値観に対する揶揄であろうが許容されるべきである。しかし、対するリベラル派からすれば、それがある人達の傷つきやすさに触れる形で痛みを与えたり、何かの揶揄が社会に蔓延<sup>まん</sup>することである種の人々が社会のなかで息苦しさを感じるのであればそれは規制されるべき——そしてその規制は、傷つきやすい人や息苦しさを感じる人たちをそこから解放して自由にするもの——となる。総じて、リベラリズムと対立するリベラル派は、社会のなかで生じたズレや歪みを矯正<sup>6)</sup>することで、バランスのとれた自由の実現を目指す立場といえよう。

中村隆文『なぜあの人と分かり合えないのか 分断を乗り越える公共哲学』

問一 傍線部(1)～(6)の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問二 本文からは次の一段落が抜けている。元の場所に戻す場合、本文中の [イ] ～ [ホ] のどこに入るか。最も適当なものを後の①～⑤の中から一つ選びなさい。

自由を推奨するはずのリベラル派の主張がなかなか国内での理解を得られずに、逆にそれと対立する保守派やナショナリズム的な考え方が多くの支持を受ける現象は、いくつかの政治的場面で見ることができる。

- ① [イ]      ② [ロ]      ③ [ハ]      ④ [ニ]      ⑤ [ホ]

問三 空欄 [I] ～ [IV] に入る言葉として最も適当なものを、それぞれ次の中から選びなさい。ただし同じものを複数回使ってはならない。

- ① たとえば      ② ともあれ      ③ さて      ④ かりに      ⑤ しかし

問四 傍線部A「若干疑わしいケースもある」とあるが具体的にどういうことか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 多様性を重視する理念を掲げているリベラル派が、他文化への寛容さや相互理解を求めるあまり、自国の利益のみに固執するナショナリズムを執拗に批判していること。
- ② 異なった文化圏の人々との共生や交流を謳っているが、現実の社会ではナショナリズムの力が強く、外国人や差別を受けてきた人が排斥されることもあること。
- ③ 人々の価値観の多様性を尊重するリベラルな人に、自分とは異なる考えをもつ人を揶揄したり、公共の言論空間から追放しようとする姿勢が見受けられること。
- ④ 偏見をなくし格差を是正することを求めるのがリベリズムの理念であるにもかかわらず、いまだに差別や偏見に苦しむ人をなくすという課題が解決されていないこと。
- ⑤ 遠く離れた国であっても、グローバル化のもと自分の国と繋がっているから、遠い他国の多様な価値観をそのまま許容することは難しい場合があること。

問五 傍線部B「思想史における『リベリズム(自由主義)』と、その後に到来した『リベラル』とのズレ」とあるがどういふことか。八十字以内で説明しなさい。ただし、句読点、記号も字数に含む。

問六 傍線部C「こうした状況」とあるがどういう状況か。その説明として適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 人々が理性に目覚め自由を獲得しようとしている状況。
- ② 偏見や頑なな思い込みが社会的弱者を抑圧している状況。
- ③ 古い政治権力が依然として人々を支配している状況。
- ④ 寛容さと合理性がかえって差別や偏見を助長している状況。
- ⑤ 自由な個人が民主主義のもとで幸福な社会を実現した状況。

問七 本文の内容と合致しているものはどれか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 財産の自由を保障するリベラリズムの立場では、生まれつきの能力差や運のよしあしによって経済格差を生み出す自由市場を容認することはできない。
- ② 啓蒙主義は古い伝統や偏見といった不合理なものから人々を解き放ち、社会に寛容の精神や弱者を守ろうとする相互理解の考え方を植え付けた。
- ③ グローバリゼーションの進展は、異なる価値観や異文化に接する機会をもたらす一方で、偏狭なナショナリズムを助長することにも繋がった。
- ④ 寛容さを謳うリベラル派が意見の異なる隣人を排斥する様は、少数者が多数者を抑圧していたかつての抑圧的なエリート主義社会を彷彿とさせる。
- ⑤ 個人の経済活動や思想表現などあらゆる面で完全な自由が保障され、何でも許容される寛容な社会こそが、リベラル派が求める社会の姿である。

## 問題一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

そもそもフェイクニュースはなぜ問題なのだろうか。もちろん、嘘をつくことや人を欺くことは倫理的によくないことである。しかしフェイクニュースには、それを発信する行為だけでなく、それが社会のなかで広まることにより生じる問題もあるように思われる。それはいったい何だろうか。(イ)

まず、真実ではない情報が広まることで、実際の被害が生じる。一般的に間違った情報をもとに行動すれば、さまざまな被害が発生する。たとえば、感染症についての間違った情報であれば、それは生命の危険をもたらす。誰かについての間違った情報が根拠のない誹謗中傷を呼びおこし、その人の人生を台無しにしてしまうかもしれない。

そしてそれは、ひとつの被害に限らない。たとえば、われわれが物事を考える際に依拠する基本的な情報が間違っていると、そこから導かれる事柄も連鎖的に間違っていくことになり、結果としてさまざまな領域に間違った信念が増幅されていくことになる。つまり、誤謬という病は伝染し、周囲に悪影響を及ぼしながらゾウシヨクしていく。さらにこの誤った考えが、瞬時に、かつ、広範な情報共有を可能にするインターネットというバイタイに載せられることによって、社会的全体も瞬く間に誤謬に感染し、実害も拡大していく。(ロ)

二つめの問題は、他者への信頼、とりわけ従来の知的権威への信頼が損なわれる点である。われわれは多くの情報を他人に依存して獲得しているが、フェイクニュースが蔓延すると、他人の言っていることを信じられなくなる。とりわけ深刻な問題となるのが、マスメディア、あるいは科学者に代表される専門家への批判と結びついたときである。実際フェイクニュースや陰謀論は、これらの知的権威への批判とセットになって発信されることが多い。

たしかに従来の知的権威の失墜を「知の民主化」とみなすこともできるかもしれない。しかし実際に生じている状況は、知の民主化というより、知のアナーキズムではないだろうか。あるいは、その空白の知的権威の座に、新たに登場したネット情報のインフルエンサーが座り、一般的に信じられている事実<sup>\*</sup>に代わる「もうひとつの事実(alternative fact)」を提供している。このような状況のなかで、われわれはいったい何を信じてよいのかわからなくなり、知的に不安定な状態に置かれることになる。

三つめの問題として、民主的な社会における意思決定の正統性が損なわれてしまう点が挙げられる。現在、多くの国や社会では、住民投票や選挙等の直接的・間接的な民主的手続きを通じて意思決定が行われている。しかしこのプロセスは、それぞれの社会の<sup>(5)</sup>セイインが政治的な問題に対する判断能力を具えていることを前提にするだけでなく、一人ひとりにある程度正しい情報が共有

されていることをまた前提にする。したがって、もしもこの前提が崩れるとすれば、民主的なプロセスそのものの信頼性が揺らぐことになり、決定された結果の正統性にも疑いの目が向けられることになる。この問題はさまざまなかたちでケンサイカ<sup>(6)</sup>しているが、それが問題として人々のあいだに共有されるきっかけとなったのは、二〇一六年、イギリスで行われたEU（欧州連合）離脱（ブレグジット）についての国民投票であった。その際、EU離脱派のナイジェル・ファラージによる「EUへの拠出金が週三億五〇〇万ポンドに達する」という発言がSNS上で拡散されたが、彼は投票後に、実際の拠出金がそれより大幅に少ない額であったことを認めた。この情報が実際の投票結果にどの程度影響を与えたのかはわからないが、もしも国家や自治体の行く末を決める集団的意思決定の結果がフェイクニュースに左右されるものだったとすれば、それは現在のわれわれだけの問題ではない。ひいては、未来を生きる子どもたちに対する責任という問題にもなってくる。

最後に、フェイクニュースによって人々が真理への関心を失っていく問題を挙げておきたい。もちろん、従来もさまざまな場面で間違った情報が伝えられることはあったが、これまでは少なくとも、間違った情報を伝えることはよくないことであり、情報の真偽は検証されなければならず、もしも間違っていると判明したら訂正する必要があると思われる。例外は多々あったにせよ、従来のジャーナリズムは世の中で起こった新たな出来事を伝えるという意味でのフェイクニュースを発信する機関として存在しており、建前であれ何であれ、「真なることを伝えるべし」という規範を共有していたように思われる。（ハ）

それに対して、ネット時代のフェイクニュースの発信者は、多くの場合このような規範を共有していない。そしてこの規範に関していえば、嘘をつく人とでたらめを言う人とは、後者のほうがより問題が大きい。たとえば、嘘をつく人は自分の主張に反する証拠を持ちだされれば、嘘を取り繕おうとしてその証拠を何らかの仕方で否定し、反証、つまり反対の証拠を示そうとするだろう。この点で、嘘はまだ真実を検証するゲームの土俵に乗っている。それに対して、でたらめを言う人はそのような証拠に対して反証しようとさえせず、端的に無視する。つまり、真実を語る人と嘘をつく人は真実を検証するゲームのなかで反対の立場に立っているのに対して、でたらめを言う人はそもそもそのゲームの土俵に乗っていない。

このような真実に対する態度の違いは、でたらめを言う人を負けることのない「無敵」の状態にしてしまう。たとえば、将棋というゲームで「負ける」ことがありうるのは、お互いが将棋のルールに則<sup>のっと</sup>ってコマを動かしているからであり、そのような共通のルールに従わずコマを自分の好きなように動かしている人は、負けることがありえない（もちろん、逆に「勝つ」こともありえない）。同様に、真実の検証ゲームの土俵に乗らない人はどんな証拠を持ちだされたとしても、そもそも証拠によって「負ける」ことはない。そこでは、もはや真実は何の規範性もたなくなってしまう。

そして、もしもこのような態度が社会全体に蔓延していくならば、現在は物事の真偽に関心をもっている人々も、その関心を

らず知らずのうちに失っていき、真偽へのこだわりをもつ人のほうが少数派になっていく可能性がある。私がつとも恐ろしいと思うのは、もしかしたらこのような変化がすでに至るところで進行中なのかもしれないということである。

ここまでの話は真偽に関心をもつことが重要だということを前提にしていた。しかしここで、「そもそもなぜ真偽に関心をもたなければならないのか」と反発したくなる人もいるだろう。そしてこの問いに答えるのは、なかなか難しい。それはこの問いが「そもそも本当に真理に価値があるのか」という、より根本的な問いを含んでいるからである。(二)

この問いに対してまず考えられるのは、真なる信念の価値に訴えることである。ここでの「信念」とは宗教的な信念だけを意味するのではなく、日常的に「……」と「……」と思っていること全般を意味する。たとえば、「このきのこは食べられる」という信念が間違っている、その信念に従って行為すれば死んでしまう可能性がある。つまり、偽なる信念はさまざまな被害をもたらす。それは偽なる信念が世界の実際のあり方に反するからであり、世界のあり方に合致した真なる信念をもっているほうが行為を成功に導きやすいからである。実際、科学が発見した自然についての多くの真理は、さまざまな発明品を通じてわれわれの生活を飛躍的に便利にし、かつ、豊かにしている。この点で、真なる信念は大きな実践的価値をもつ。

この説明は、真偽の重要性を真理の価値自体によってではなく、真なる信念がもたらす結果の価値(生活の豊かさや生命の安全など)によって説明するものである。たとえば、お金はそれを使った結果として、おいしいものを食べられたり、楽しい映画を観られたりする点で価値がある。これを「道具的な価値」という。同様に、真なる信念は何か別の価値あるものを獲得するための道具的な価値をもつ。しかし、このように説明してしまうと、真なる信念は常に追求されるべきものではなくなくなってしまふ。というのも、<sup>D</sup>真なる信念は、常に利益を与えてくれるとは限らないからである。

たとえば、私が崖を飛び越えなければならぬ状況にあったとしよう。私とその崖を飛び越えられる確率が著しく低いことを正しく認識している場合、その真なる信念は私の足をすくませ、跳躍を失敗に導くこともある。このとき、真実を知らない場合のほうが生存の確率は上がることになる。あるいは、自分の病気が深刻なものであると知ると知るとは、大きな恐怖や不安をもたらす。したがって、この場合も知らないほうが結果的に幸せに過ごせるかもしれない。このように本当のことを知るとは、実際にはさまざまなデメリットをもたらさう。そして、これはニュースに対してもあてはまる。真実を伝えるニュースを知るとは、ときに不快な思い、不安、悲しみ、怒り、等々さまざまなネガティブな感情を引き起こす。それゆえ、真実よりも自分にとってポジティブな感情をもたらしてくれる「ニュース」を求めたほうがいいと判断することには一定の合理性がある。つまり、真実は常に人に幸福や利益をもたらすとは限らないから、真実を気にかける必要などない、という議論は可能であろう。(ホ)

では、このような反論に対してどのように応答できるだろうか。まず真理から遠ざかることはその場では幸福や利益をもたらす

かもしれないが、長い目でみるとやはり結果として得られる幸福や利益は減少する、と答えることはできる。これはフェイクニュースがどうした場合に許容され、逆にどういう場合に許容されないのかに関わっており、考えていきたい。

さらに真理には道具的な価値だけでなく、それ自体に価値があると答えることもできるだろう。お金の例でいえば、他の価値あるものと交換できることは道具的価値であるが、観賞用の金のコインが人を惹きつけるのは、それ自体が美しさという内在的な価値をもっているからである。真理もこれと同じである。事件の真相がどうか、世界が本当のところどうなっているのかに人が惹きつけられるのは、真理がそれ自体内在的な価値をもつからである、と。

山田圭一『フェイクニュースを哲学する―何を信じるべきか』

(注) \*アナーキズム……一切の政治的、社会的権力を否定して、個人の完全な自由と独立を望む考え方。

\*インフルエンサー……他に影響力のある人やもののこと。特にインターネットの消費者発信型メディアで他の消費者に大きな影響を与える人。

\*「もうひとつの事実 (alternative fact)」……二〇一七年一月、ホワイトハウス報道官の虚偽発言を擁護するために米国大統領顧問が発した言葉で、虚偽情報を正当化した。

問一 傍線部(1)～(6)のカタカナは漢字に改め、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二 傍線部A「それが社会のなかで広まることにより生じる問題」とあるが、筆者の考えと合致しないものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 従来のジャーナリズムが共有していた「真なることを伝えるべし」という規範が共有されず、フェイクニュースによって人々が真理への関心を失っていく問題。
- ② 民主的な社会において、その成員に政治的問題への判断能力が具わり、ある程度正しい情報が共有されているという前提が崩れ、意思決定の正統性が損なわれる問題。
- ③ 真実ではない情報の拡散によりさまざまな実害が発生し、そこから導かれる事柄も連鎖的に間違っていき、さまざまな領域に間違った信念が増幅されていく問題。
- ④ 他者への信頼、とりわけ従来の知的権威への信頼が損なわれ、われわれは何を信じてよいのかわからなくなり、知的に不安定な状態に置かれることになる問題。
- ⑤ 国家や自治体の行く末を決める集団的意思決定が、住民投票や選挙等の直接的・間接的な民主的手続きを通じて行われず、決定された結果が無効になる問題。

問三 傍線部B「後者のほうがより問題が大きい」とあるが、なぜか。七十字以内で説明しなさい。ただし、句読点、記号も字数に含む。

問四 傍線部C「道具的な価値」とあるが、対比して用いられている語を、本文中から六字で抜き出しなさい。

問五 次の一文は、本文中のどこに入るか。最も適当なものを、①～⑤の中から一つ選びなさい。

これはもつともわかりやすいフェイクニュースの問題点である。

- ① (イ)
- ② (ロ)
- ③ (ハ)
- ④ (ニ)
- ⑤ (ホ)

問六 傍線部D「真なる信念は、常に利益を与えてくれるとは限らない」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① さまざまな発明品が生活を便利で安全なものにしたが、真なる信念が生活を飛躍的に豊かにしたとは言えない。
- ② 偽なる信念はポジティブな感情をもたらしてくれるので、より良い社会を実現するためには欠かせないものである。
- ③ 「このきのこは食べられる」という偽なる信念に従って行為する場合、死んでしまう可能性から逃れることができる。
- ④ その崖を飛び越えられる確率の著しい低さを正しく認識する場合、真なる信念は跳躍を失敗に導くこともある。
- ⑤ 病気の深刻さを知るとは恐怖をもたらす場合があるので、偽なる信念を持つことで重い病を治すことができる。

問七 本文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 即座に広範な情報共有を可能にするインターネットというメディアに載せられることによって、フェイクニュースによる実害はさらに拡大していく。
- ② ブレグジットの国民投票を契機に、民主的な社会における意思決定の正統性がフェイクニュースに左右される問題が人々に共有されるようになった。
- ③ 従来の知的権威の失墜は「知の民主化」であり、新たに登場したネット情報のインフルエンサーの提供する事実が民主的事実とみなすことができる。
- ④ 世界の実際のあり方に反する偽なる信念がさまざまな被害をもたらすのに対し、世界のあり方に合致した真なる信念は行為を成功に導きやすい。
- ⑤ 観賞用の金のコインがそれ自体の美しさという価値で人を惹きつけるのと同様に、真理も道具的な価値だけでなく、それ自体が価値をもっている。









